

## 姉崎正治の講座構想

— 一書簡より —

鈴木 範 久

海老名弾正主筆の月刊誌『新人』8巻4号(1907年4月1日)の「寄書」欄に「文科大学の神学講座に就て(姉崎博士よりの来書)」と題した記事が掲載されているので紹介したい。

書簡の冒頭に記されているように、これは『新人』の前号(8巻3号, 1907年3月1日)に載った「文科大学の神学講座」の記事に応えたものである。その記事は、正確には「彙報」欄における「相原生」名の「文科大学の宗教問題」と題された一文である。「文科大学の神学講座」はそのなかでとりあげられている。「相原生」は、たぶん相原一郎介のことであろう。相原は仙台の出身で、1901年に上京、東京帝国大学文科大学哲学部に入学、宗教学を専攻していた学生である。仙台の日本組合基督教会で受洗していたが、上京後は海老名弾正の本郷教会に出席し、日曜学校長などをしてきた。のち文部省の宗教局につとめる。

相原は、上の記事のなかで、かつてキリスト教の「反対の本部」ともみられた東京帝国大学に、ついにキリスト教に関する講座の出現したこと、それはケーベルの「基督教の発達」の講義と村上直次郎の「日本基督教史」の講義であるという。

姉崎正治の書簡は、この記事に対して誤解を正すべく寄せられたものである。学生相原の書いたものために、まず大学における「講座」とは何

かを述べ、当時の宗教学科の状況と、その将来構想を語っている。それによると、印度哲学、日本宗教史、キリスト教史および一般宗教史、キリスト教の順で講座の計画が考えられている。これがその後どのように実現されたかを、今日のみからみると興味深い。また「神学講座」とは明瞭に一線を画するものであることも述べていて、神学と宗教学との相違についての姿勢も示されている。宗教学研究の歴史の一コマを語る重要な書簡と思われるので全文を次に記しておく。

### 文科大学の神学講座に就て

(姉崎博士よりの来書)

新人八ノ三に「文科大学の神学講座」とて宗教に関する講義の種類等御紹介ありしにつきて一言申上候

大学にて講座といふは一定の教授あり、研究室ありてその學科に関する授業及び研究の組織を整へたるものたるを要するも、今日の文科大学にては建物狭隘のために研究室を設けざる學科多く、只勅令にて講座の制を定め、之に一定の責任ある教授を任命するを以て講座の設備と致候、この何れの意味にても今日の文科大学には神学の講座はなき有様にて、世間にて往々神学の講座と傳へ候は宗教或はキリスト教史の講義のある事を傳へた

るものにて、講座にては無之候、即ちケーベル先生のキリスト教史は先生が哲學史擔任の副事業にて、村上氏のは日本歴史の一講義に候、されば將來文科大學に神學の講座を設くべきや否やにつきても、今日より研究して、設備を他日經費の許す時（何時なるべきや知れざれど）に期する外なき有様、今日何か神學の講座ある如く思はるるは早計の事にて、ケーベル先生は先學年と今學年とにキリスト教史を講義し居らるれども、次の學年には、その代りにスピノザを講義するなり何なり、先生の自由の有之、村上氏のも同様なれば、此等は全く不定の事業にて、大學に神學の研究始まりしといふ事出来ず候

就ては將來果して大學に神學の講座を設くべきや、又設くるならば、如何の講義を設くべきやといふ事も、獨り大學のためのみならず、今日より研究すべき事に候、神學の講座或はその他の宗教に關する講座を設くとすれば、今日にてはそれ等に最も關係ある學科を擔任致候身として小生の意見を申述べ世間の批評を仰ぎたく候

今日は文科大學には宗教學の講座一つあるのみにて、佛教に關係深き印度哲學の講座も、何時設置せらるるや見込なき有様なれば、如何に必要な學科ありても、直にそれに着手し得ざる次第に候、現今の宗教學講座は一般に宗教の研究を目的とするものにて、今まで或は比較宗教學といひ或は宗教哲學と稱したるものに當り候、兎に角この一つは設置するを得、研究室も二、三年の後に設備し得る運びなれば、今後この方面にて講座の新設をなすべしとすれば、差しあたり、學則の上にて受験學科の一つとなれる印度哲學を第一にすべきは当然と信じ候、それに次ぎては日本宗教史なるべく、此は東洋哲學と國史にて現今も幾分は講義もあれど、特に一講座を設くる必要あるべくと信じ候、その次にはキリスト教史と一般宗教史たるべく、此はその人を得るの難易にて先後を決せらるべき者となるべく候

さてかくして幾年か幾十年かの後にキリスト教に關する講座を設けんとするには、第一に少くともギリシャ語に精通して教史の研究を成し得べき

人を要すべく、此點日本人の研究者にては大に困難の點にて、理論よりも事實上講座新設の第一難關なるべく候、假にその人を得て講座を新設したりとせばその方針は如何といふ問題になれば、日本の大學にてドグマチクやシンボリックの研究をなす必要はなく、全く歴史的研究として、キリスト教史の研究を目的とすべき者と思はれ候、即ち神學の講座にあらずしてキリスト教史の講座なるべく候、この方針はオランダの如きキリスト教國大學にて執れる方針にて、日本にては尚更此の方針を執る必要可有之候、キリスト教雑誌の中には神學講座云々の事を傳聞し又誤解して大學の宗教研究に對する不満を漏らしたるものもあるやに聞き及び候へども、今の大學にてデノミネーションの神學講座を設けよなど言ふは、餘りの注文にて到底此の如き事の出來を設けよなど言ふは、餘りの注文にて到底此の如き事の出來る筈なきは常識ある人の許す所なるべく候、デノミネーションの若くは純粋に神學風の神學研究が必要ならば、そはキリスト教の教會自らのなすべき事にて、大學に對して之を注文するは、餘程虫のよき話しと見え候、それが出來ぬとて小生輩に突つかかれても、此は御免といふ外無之候

要するに、印度哲學はその名ありて、その講座も教授もなく、高楠君の義侠にて受験だけはなし得らる様のやりくりをなし教育學すら講座の名はありて、教授もなく、經費も設備もなき有様に過ごせる今日の文科大學にとりては、希望は山ほどありても何事も實行せられざる有様、此際キリスト教に關する講座のなきは、恥辱ながら已むを得ざる状態に候、小生の希望にては、假令講座は出來ずとも、助教授なり講師なりとて日本宗教史とキリスト教史との適當なる専門家一人を得て、此にて講座新設までも缺陷を充たすの外なしと信じ候、小生の講座の如きも明治三十年の春故外山先生の時代に宗教學講座を設くべき事議決ありしより、一昨年三十八年にその實行を見るまで、八年がかりの仕事にて、それすら、今日にては研究室もなければ、助教授も助手もなき有様に候されば一講座の設置といふ事は今日の大學にては如何にしても十年以上の仕事に候、此等の點は世間の諒恕を

仰ぎたく、今日より己に神學の講座ある様に見、  
又はそれに對して注文或は攻撃などするよりも、  
先づ大學をして之を設置し得る様に、外部よりも  
助けられたきものに候 右事情御報まで

姉崎正治